

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより 第44回

花見書で描いた
軍道の桜並木



軍道の桜並木

かつて「桜通り」は「軍道」と呼ばれ、軍都宇都宮の象徴だった。その通り沿いには、各連隊本部や兵器支廠（現中央公園）をはじめ、憲兵隊本部（現栃木県桜別館）、借行社（現桜美公園）、師团长官舎（現地方合同庁舎）、そして師団司令部（現栃木病院）など軍施設が点在し、朝な夕なに多くの将兵が往來した。現在の桜通り十文字付近には、「軍隊商い」と称する軍隊相手の商店が軒を連ね新開地を形成。面会や除隊土産を買い求める兵隊や家族で大変賑わった。今も交差点の角に、師团长官舎前庭に植栽され成長した一本の巨松が天を突く。

また、軍道は桜の名所としても知られていた。沿道には五千本もの

ソメイヨシノが枝を広げ、春ともなれば満開の桜が花のトンネルと化した。大正中期には宇都宮随一の桜の名所となり、見世物小屋やサーカス、露店などが軒を連ねた。最盛期には数千人もの花見客で賑わったという。今ある桜通りの名称は、この「軍道の桜並木」に由来する。

軍道が建設されたのは一九〇八（明治四十二年）のこと。第十四師団の設置に伴い菱川村鶴田（現文星芸術大学附属高校二帯）に駐屯した野砲兵第二十連隊から国本村宝木（現国立宇都宮病院帯）の師団司令部を結ぶことを目的とした道路であった。その長さ二キロ、道幅が十間（約十八メートル）あったことから十間道路とも呼ばれていた。

当時このあたりは市街地から遠く離れた西はずれに位置し、人家はほとんどなく、人の往來も極めて稀な寂しい場所だった。そのため師団移駐の恩恵に報いるために、ときの宇都宮市長本多謙吉と河内郡長梅村寛造が相談し、一九〇八年から一九〇九（明治四十二年）にかけて、軍道の両側にソメイヨシノの苗木約五千本を植えたのが桜並木の始まりである。

のちに栃木県知事中山巳代蔵が起草し建立された桜植樹記念碑に



宇都宮市歴史博物館蔵

は軍道の建設により、「兵舎周辺の道路も広く、平坦に造成され、都市の農民や商人も等しくその恩恵を受け、公私とも交通には便利になった。武士道を大いに発揮させるために有益な事業をとるの思いから、桜の苗木を植えた。わが国には古来「花は桜木、人は武士」という言葉があるが、この事業は誠に有意義である（碑文大意）」と感謝の言葉が記されている。この記念碑は、現在、陸上自衛隊宇都宮駐屯地内に現存。篆額は師团长鮫島重雄によるものがだった。

しかし、長年にわたり市民に親しまれた桜並木だったが、交通量の増加に伴う道路拡張計画により一九六三（昭和三十八）年伐採された。「桜並木」にありき」の碑だけが残る。